第433号 昭和56年7月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年3月31日 第三種郵便物認可

ヴェッターホルンの 秩父宮雍仁親王殿下

昨年七月十五日三水会の例会で田口二郎会員が講師となり、ブラヴァント氏所有の山案内人手帳のスライドが映写された。その中にブラヴァント氏のアルバムから複写してきた秩父宮殿下の写っているものがあった。

その後九月頃になって東九州の松田雄一会員と関西の富田健一会員からそれぞれスイスの新聞の週末特別付録のコピーが送られてきた。この新聞は滋賀県大津市とインターラーケンが姉妹都市となったのを記念して発行されたものでそれにはブラヴァント氏の案内人手帳を参考にしたと思われる日本人登山者のことが書かれていた。この新聞の中にもここに掲げた秩父宮殿下の写真が載っていた。

本年五月十五日付のブラヴァント氏の手紙によると、新聞社から大津市の代表団が来るため記事にしたいと申し出があって、同氏が気軽に書き流し、それをもとにして新聞社の方でまとめたもの、このため表現不足の箇所がいくつかあるとのことだった。

渡辺（兵）さんのお話ではこの写真を所有しているとのことだったが、これまで公開されたことのない写真なので、この機会に会員諸氏にご披露することとした。

前述の新聞記事と合せ松本重治さん、槙有恒さんから頂いた手紙を参考にこの写真について多少の説明を加えてみたい。

一九二六年（大正十五年）八月十六日、松方三郎さん、松本さんが所用でグリンデルヴァルトを去り、槙、渡辺八郎のお二方が殿下に従って五人の山案内人とヴェッターホルンに登った（「山岳」26年）。

この時のザイルシャフトは殿下の組が五名、渡辺さんの組が三名だが、前日までのファウルホルン（二六八〇㍍）とクライネ・シャイデック近くのチュッゲン（二五二〇㍍）の登山から殿下には二人の山案内人をつけることが決まり、これに槙さんともう一人の山案内が加わって一組五人となった。人数の多いこのパーティについては、エンゲルヘルナーのゲムスリュッケからオクセンタールへの下降時に起きた落石ではかなり心配したという。しかし小屋に着いた時は全員このことを忘れていたと新聞記事には書かれている。

七時四十分の朝の光を左手（東側）に浴びながら、右にアイガー左にフィーシェルヘルナーを背景とし、一行七名を撮影したのは槙さん。写真左端にリュックを背負い、腰をおろしておいでなのが殿下。初めてこの若々しい、自然なお姿を写真に見て覚えたすがすがしさには、今もって忘れられない何とも言えぬものがあった。

殿下の右に坐っているのが渡辺さん。秀でた登り手であったと記されている。殿下の右に立っているのがフリッツ・アマター。パイプをくわえ、ザイルを体に巻いて

山をきれいに ゴミは持ち帰ろう

1981年（昭和56年）
7月号（No. 433）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目 次

ヴェッターホルンの秩父宮雍仁親王殿下 ……（1）
五月連休の穂高岳（上） 折井健一 ……（2）
科学研究委員会第8回講演会「山の意外な顔」 ……（2）
富士山安全ルート決まる ……（3）
図書紹介 ……（4）
「岩と人」「峭峻の白き尾根」東西南北 ……（4）
蔵王漫歩（麻生武治）
愛鷹山不登拝記（河野幾雄）
剱岳の「錫杖と剣」についての一考察 平柳一郎 ……（5）
報告 ……（6）
静岡支部総会，熊本支部総会
第35回ウェストン祭（信濃支部）
第1回日韓親善交歓会と交流登山報告（青年懇談会）
お知らせ 図書委員会 ……（8）
追悼 岳友 小池新二氏を悼む ……（9）
会務報告・ルーム日誌・会員移動 ……（8）～（11）
図書受入報告 図書委員会 ……（10）
カット／松本慎太郎

▶日本山岳会事務取扱時間
月，火，水，土曜 10時～20時
木，金曜 13時～20時
日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日 13時～20時

●夏期休室 8月10日（月）～15日（土）

留守番電話（電話番号234―六六五九）

いるのはエミール・シュトイリ。三田さんからフーラーではないかとご質問があったが、ブラヴァント氏も松本さんもまた槙さんもこれはエミールだと確認された。腰を曲げて渡辺さんに話しかけているのがフリッツ・シュトイリ、その隣がアルバータに同伴したハインリヒ・フーラーで、三田さんがお持ちの彼の墓碑の写真には一八七六年に生れ一九六〇年に亡くなったとあった。右端でパイプをくわえゴーグルをつけているのがブラヴァント氏。ブラヴァント氏のくわえているパイプは、槙さん、松方さん、ブラヴァント氏の三人でツェルマットに行った時、槙さんがまっ先に立ち寄ったタバコ屋で買ってくれたものだそうだ。それまでタバコを口にしなかったブラヴァント氏を見て、パイプをくわえない山案内人なぜ考えられないといって槙さんがくれたのだという。この頃の槙さんは夕方になると小屋の前に坐りパイプにタバコをつめながら輝く氷河や、山々を眺めていた。生き生きとした彼のその時の微笑みは今もブラヴァント氏の心に浮んでくるという。

この時の殿下のなされた山行については会報405号のブラヴァント氏の山案内人手帳(4)をご覧願います。

（岡沢祐吉）

（出席者・順不同　島田、折井、沼倉、斎藤、山崎(安)、宇津、高田、錦織、関塚、麦倉、千葉、菅野、網倉、関口、田口、成瀬、久保、村松、金沢、原、今村、福井、広羽、勝田、小林(由)、坂本、鈴木、渡辺、岡沢）

五月連休の穂高岳（上）

折井健一

今年の豪雪は近頃稀であったが上高地へのバスの運行も、恒例の開山祭（四月二十七日）には間に合わず中止となった。

五月三日に予定した上高地山岳研究所の開設もこの状況では一週間先とせざるを得ないだろうと地元から連絡があった。それにしても、果して一週間後の五月九日頃に水源地から水管が引けるだろうか気になった。ともかく上高地へ入って様子を見ようと、二日、一人で上高地へ出掛けることにした。天気予報は芳ばしいものではなかったが大きく崩れることもなさそうであった。

二日、高尾発の早朝普通列車は連休の入りにもかかわらず、座席に余裕があった。

日野春のあたりから眺める八ヶ岳は意外に鋭い峰に見え、赤岳の残雪は極楽鳥の冠のように美しかった。日頃見馴れた山も、季節の移り変りと天候によって、こんな

（科学研究委員会報告）

山の意外な顔

——北極氷河のプッシュモレーンと吉田大沢の岩なだれ——

お茶の水女子大教授　式　正英氏

昭和56年5月22日（金）夜　ルームにおける科学研究委員会第8回講演会要旨

＊　＊　＊

御岳の噴火や、昨年夏富士で起きた落石災害などは、山の地形変化の中で意外なことと受けとられている。北極氷河のプッシュモレーンもその一例で、大抵の氷河の末端にはふつうは静的なモレーン（堆石）しか見られないのに、北極諸島中、アクセル・ハイベルグ島のトンプソン氷河では、モレーンが氷河とともに移動し、凍った砂礫層をも持ち上げ、高さ60m、幅2Km長さ500mにも達する動的なモレーンの丘を作っていて壮観である。

しかしこれらの意外さも、地質年代という長期的な眼で見れば繰返し起っている通常の現象とみなされる。すなわち「過程同一説」によって説明がつくと考えられるのである。

たとえば御岳の噴火は七世紀以降史実にその記録は見られない。しかし今回の噴火の噴出物の火山灰は頂上付近で最大70cm、山麓では数ミリであって、この程度の灰ならばその後の雨で流されてしまうことは充分あり得ることである。木の破片の炭素測定とか、地層によって証拠づけられず、噴火の事実はやがて見逃されてしまう可能性がある。この意味でこの程度の御岳の噴火は数千年の時間に限っても、むしろ意外な出来事、すなわち「天変地異」にはつながらないと言ってもよいだろう。

富士山の場合、冬富士登山は確かに厳しいが夏は自動車道もあり、山の姿も優しく、事故など起らないと考えられていた。それが全長一六〇〇㍍にわたり死者12名を出す異常な惨事を起したのである。しかし地質的には富士山は短時日にでき上った粗製の火山で、岩石はもろくおまけに熔岩層と火山砂礫層が交互に重なり、火山砂礫層の方は極めて侵蝕されやすく、熔岩層のオーバーハングが生じ易い状況にある。これでは岩ナダレの起らない方が不思議である。特に昨夏は冷夏で雨が多く、地下水圧が一時的に上昇していたと思われる。同じような例は明治44年夏、姫川上流の稗田山でも起り、大雨の数日後、突如大崩壊が発生し、下流の集落が土石流の下に埋没した。

一方富士山のようなもろい山の沢では常に土砂が移動していると考えてよい。そんな所に大勢の人間が通過する下山道を作ったりするのは誤りで、観光車道建設とともに今回の事故には人災的要素があったことも否めない。これが一六〇〇㍍の広範囲にわたり数十名もの死者重傷者を出した第二の原因である。何時岩ナダレが起るかその時刻の予報は難しいが、起きても不思議ではない災害であった。

北極氷河のプッシュモレーンも決して一カ所だけに限定されるというような珍しい現象ではないことが明らかとなっている。地下数十㍍にわたって凍結している寒地の土地では、この凍結層も前進する氷河の巨大な圧力によって次第に持ち上げられ、押しかぶせ断層が生じ、アウトウォッシュ（氷河前方の河成堆積層）を破砕してプッシュモレーンの丘を作って行く。その例はカナダ北部だけでなく、ノバヤゼムリヤ、グリーンランドその他各所に見出されている。さらに数万年前の氷河期には北米も北欧も大氷河におおわれていた。この時代のプッシュモレ

に違うものかと改めて見直した。

塩尻トンネルを抜けると、町を囲む間近の西斜面は一杯の桃の花盛りで、まさに信濃の春はたけなわというところであった。

新島々駅からのバスはその日からの運行で、釜トンネルまでは至極順調に走ったが、流石に連休で上高地ターミナルの駐車場はパンク。一台が出なければ一台も入れず、道路脇は放置された車が並びバスは交差もならず車の列が延々と続く。バスの車掌氏も降りたり乗ったり、車の誘導に汗を流し、トンネルの出口からターミナルまで、一時間半もかかった。

岳沢は沢一杯真白い雪で黒点一つなかった。三月程度の積雪状態と見受けられた。山研のテラスで遅い昼食。道路から玄関まで営林署の好意で除雪されていた。水源まで足を運ぶ。この分だと来週末の水管敷設には一段の工夫が必要と思われた。春の雪融けの意外の早さを期待する外ない。

明日は穂高岳山荘へ登ろうと心に決める。今日のうちに出来るだけ足を延ばすことにする。

パラついていた雨もやんだので、横尾山荘までゆっくり休まずに歩く。調子が悪ければ戻ることにしていたが、このぶんだと天気さえ悪くならなければ穂高山荘まで登れるだろうことを期待して横尾山荘へ。徳本峠入口から先は、全くの雪道となった。高曇りで、奥又白谷は稜線まで姿を見せてくれた。想い出の谷、想い出の峰、あれこれ昔のことを想い出しながら横尾山荘に着いた（十七時半）。キャンプ場はカラフルな天幕で埋まっていた。一五〇張りくらいはあるだろう。山荘は相当混んでいたが、一部屋を用意してくれた。電気あんかを布団に入れて貰ったので暖かくぐっすりと睡眠がとれ、疲れは残らなかった。

三日、横尾山荘を出て（七時半）、橋を渡る。夏道は全く使わずに、河床を真直ぐたどる。岩小舎を過ぎてしばらく登り、右岸森林帯の踏跡を少しばかりたどり再び河床へ。本谷橋は全く雪に埋って、本谷側から大きなデブリが河幅一杯に押していた。

雪の割れ目から湧き出すようにコトコトと流れ出る水の音に春の気配を感じる。今日の稜線はガスで全く見えない。涸沢ヒュッテは雪の下で屋根も隠れている。

ここでも天幕は、二、三百張り。大きな村である。北尾根側の斜面では数パーティが雪上技術訓練中で、気合の入った大声が聞えてくる。

ザイテングラート末端の岩が大海原の中の島のように浮き出している。外は全く白一色、冬化粧のままのたたずまいである。時折り、突風が奥穂高岳の東面を叩き付けていた。天候はどうやら下降の様子。涸沢ヒュッテから穂高山ーンの痕跡はもっと広範囲に分布している。前記アクセル・ハイベルグ島だけでも既にプッシュモレーンは19カ所に見出され、隣のエルズミア島でも16カ所見出されている。プッシュモレーンのすべてが明らかというわけではないが、くり返し形成されて来た事実があり決して意外な現象ではないといえる。

天変地異と考えられるような意外な現象も、地学的には過程同一説で説明することによって納得され、意外さは減じてくるようにも思われる。しかしそれだからといって思考が沈着し、つまらなくなってしまうということはあるまい。深い視点で眺めることによって、別の局面の意外さは次々と出てくるであろう。私達はむしろ意外さを求めて山に入ってみたい。

〔参加者〕村井米子、斎藤かつら、中村純二原謙一、堀川清、三栖寿子、沢井政信、熊井明織田沢美知子、神谷光昭、小林碧、梅野淑子、江村真一、油谷次康、渡辺正臣、小西奎二、高橋詢

（中村純二）

富士山安全ルート決まる

山梨県では、富士山の山開きに備えて、昨年の落石による事故を再び起こさないために、安全な下山ルートの設定を検討していたが、このほど新しいルートが決定したので、このルートの徹底を登山者に呼び掛けている。

昨年まで下山ルートとして使われていた吉田大沢の「砂走り」は、昨年の落石事故以来全面的に使用を禁止しているので、これに代わる下山ルートとして、つばくろ東沢ルートを新設したもの。

このルートは、八合目の山小屋「富士山ホテル」から東の須走口登山道に入り、途中の山小屋「江戸屋」から西側のつばくろ東沢を下り、御中道を経て六合目で吉田口登山道に合流するルートで、所要時間は約二時間である。

なお、登山ルートは従来どおりの登山道を使用する。

また、「富士山安全指導センター」を六合目に設置して、登山者の安全指導や、気象情報の提供などを行い、安全登山の徹底を図るが、県では綿密な登山計画、十分な装備など登山マナーの徹底を強く望んでいる。

（山梨県観光課）

〔富士山登下山道概念図〕

荘へは直登。幾つものパーティが一線にあるいは二線に登って行くのが見えた。ザイテングラート側に沿って登った。稜線は段々暗くなって吹き降ろす風が冷たい。天気予報は寒冷前線の通過を報じていたが、ついに雨まじりの風となった。途中でヤッケを着用する。

（以下次号）

図書紹介

岩と人
——日本岩壁登攀史——
斎藤　一男著

本書は登山史のうち特にバリエーションルートからの登攀に焦点を絞ってまとめたものである。

全部で五章からなるが、序章と第一章はウェストンの鳳凰山地蔵仏の登攀から穂高屏風岩登攀まで主に学生が中心になって活躍した戦前の記録。第二章と第三章は、戦後の社会人山岳会の台頭と、谷川岳からヨーロッパアルプスへその目覚ましい発展の足跡を追う。最後の第四章はヒマラヤバリエーション時代の到来と将来の展望である。

サブタイトルに日本岩壁登攀史とあるが、以上の内容からみてむしろ日本人によるバリエーションルート登攀史と言うべきものである。

この本で最も読み応えのあったのは第三章の中の〝未踏への探索〟〝先蹤者と後継者〟〝渓谷への傾倒〟と題する部分であった。例えば〝未踏への探索〟は、地方の社会人山岳会の、これまた地方のあまり知られていない山々のバリエーションルートの記録を調査し追跡したものである。ここには鬼ヶ面山、御神楽岳、利尻山、霞沢岳、戸隠山、錫杖岳などの登攀記録が載っている。これらの記録はわが国の登山史では今までどちらかと言うと等閑に付されていたものである。著者も言っているように、日本の岩場は何も谷川岳や穂高や剱岳ばかりではないだろう。今後、更に全国の岩壁のかくされた登攀記録を探索発掘し集大成がなった時、著者の言う真の日本岩壁登攀史が出来上るのである。豊富な資料を持ち、社会人山岳会の中枢的立場にある著者のこれからの調査探究に大いに期待したい。

本書は雑誌（岳人）に連載されたものを後に一冊にまとめたものである。そのためやむを得ない面もあるが、記事に若干の重複があったり、取り上げた山域、時代が項目ごとにあまりにも飛び過ぎる。歴史に関する本は話しがあまりとびとびになると読みづらい。単行本にする時、山域か時代かのどちらかに基準を設け整理して欲しかったと思う。

またそのほかの読後感の一つに、充分な歴史的認識を得るにはやはり充分な時間による淘汰というものが必要なのではなかろうか、という思いが浮んできた。

東京新聞出版局　昭和五十五年六月　A5版　三三七頁　定価二八〇〇円　（岩瀬皓祐）

峭峻の白き尾根
ダウラギリI峰南東稜・一九七八
群馬県ヒマラヤ登山隊編

一九七八年秋、群馬県ヒマラヤ登山隊によるダウラギリ主峰（八一六七メートル）登頂報告書である。

一行は十月十九日と二十一日二隊が未登の南東稜より第六登を果したのだが、第一隊の登頂者宇部明隊員は昨年五月、チョモランマ北壁で墜死したことはまだ耳新しい。

写真集を兼ねたがっちりした造本で内容は「ダウラギリI峰南東稜登山を顧みて」、「本登山のいきさつと意義」、「隊員、リエゾンオフィサー及びシェルパについて」、「行動記録」など十一章にわたり、くわしくその行動をまとめてあり、英文報告もある。

行動中四人の隊員を失いながら執念の登頂を目指してのひたむきな意欲がよくうかがわれるし、帰国後充実した報告書をまとめ上げた努力は大変なものであったろう。

資料編で「ダウラギリI峰登山史」（宇部明）、「日本人の八千メートル峰登頂者一覧表及びその私見」（八木原圀明）、「天候表」（田中成幸）が発表されており参考になる。ことに八木原氏の調査は登頂者の生年月日まで克明に記載した綿密なもので、三十項目にわたり延べ四十九名の登頂者の分析が行われており、注目すべきデータである。

一九八〇年九月、群馬県山岳連盟発行、三〇六ページ、非売品（入手希望者は頒価三九〇〇円、送料五百円を群馬銀行前橋東支店245916。群馬岳連海外登山研究会谷弘あて振り込めばよい）

（山崎安治）

蔵王漫歩

麻生　武治

百花繚爛の最上平野を囲む山々がまだ真っ白な五月初め、二泊三日の旅を蔵王山に試みた。今さら歳をいうのもおかしいが、八十二才の老人に残雪の多い山坂を歩けるか出発前一寸心掛りだったが、本会名誉会員の後藤幹次君の喜寿を大いに祝おうじゃないかとの主旨による後輩どもの企画である。この機に便乗してと申しては今井友之助、清野恒両会員に失礼であるが彼等も昨秋既に古稀を迎えているので、蔵王に縁の深い両君にも参加願って盛大な集りとなった。

私は杖にすがり脚を引摺ってでも参加の意欲に燃えた。

総勢二十五人の大パーティが初日蔵王温泉の深山荘高見屋で開かれた。蔵王温泉は私が昭和六年三月初旬に後藤幹次君の案内でスキー講習に参った頃は、麓の街道筋の半郷（今の蔵王口）から三里のダラダラ坂路を歩きであった。最上高湯と呼んだ蔵王温泉は今も昔に変らぬ泉質と出量を保っているが、町の大湯の天窓から細雪が舞込むといった風情は無くなってしまった。旅舎にしても清潔衛生の向上は結構であるが、食膳の都会風はいただけない。

愉しい老岳友の集いに、飲みかつ食べるのも大切な要素ではあるが、物心がついてこの方早寝早起きが茶飯事となっている私には、早暁の山の気こそ最高の御馳走であるから、翌朝は白々明けに宿を

劔岳の「錫杖と剣」についての一考察

平柳一郎

表題に関して、まだ論じられていない側面があるように思えてならない。それは、錫杖と剣の関係についてである。

昭和三十四年に表記物件が重文に指定されたが、その指定書に、「銅錫杖一柄」とあり、その従として、「附鉄剣一口」と記されている。私の疑問は、この両者の主従の認識について、登頂した修験者あるいは修業僧は、剣をひたすら主と考え、神仏の加護を願っていたのではなかったかということである。むしろ、剣に対応する錫杖は、はじめから念頭にはなかったのではないか。

古来、日本には神社仏閣の宝物として刀剣を祀る信仰があった。古くは奈良の石上神社の七支刀がその尤物である。この信仰が山岳におよんだとき、登頂者が剣を携え、山巓にそれを祀ることは不自然ではなかったはずである。

他方、錫杖は僧侶や修験者の持つ杖で、山野の歩行の先導に振ったり、托鉢の際にうち鳴らして行乞を門前にしらせたものである。後年、美しく複体の仏をかたどる修飾の錫杖も出現するが、使用目的は変っていない。

剣岳に登頂した修験者は、錫杖をかってのアルペンストックのように使ったのではなかったか。つまり、単なる道具としてである。

山頂に達した行者は、鏡のように研ぎすまされた剣を信仰の山の頂きに宝剣として祀った。そして杖とした錫杖もそこに放擲された。両者は隔時登頂の遺物としても考えられるが、しかし悠久の時間は流れた。

発見された剣は、腐蝕してかっての赫奕の姿はどこにもない。木の根のように鈍重な形骸を残すだけとなった。しかし錫杖は、当時のありふれた素顔を緑青の華やかさで纏うことになる。まるで岩屑に咲いた緑の花である。近代の美意識は、この花への驚愕によって宗教的価値観を見事に逆転させることになる。

歴史が進むにつれて、過ぎ去った時代の両者の現実性は変貌し、価値観も曖昧となる。その時代の生活と文化が現代人の記憶から遠ざかり、理解がおよばなくなるからである。

この「緑の花」はあくまでも宝剣として祀られた「木の根」の従物であった。それを主物のように錯誤したのは、近代の眼の恣意であり、歴史に対する真摯な魂の所業ではなかったと思えるのである。

ただひとつ剣にとってのすくいは、明治四十年八月五日付「富山日報」の記事が、錫杖より一日早く、剣の石版を図示紹介していることである。これは、山岳信仰のまなざしがなおも遺留二物のその時代の思潮に、背いていなかったことを証するものであろう。

剣岳登頂の諸問題は、私論以外のところで論理的であろうとした。近代理性が合理主義に従おうとしたのである。しかし、別のところで牛よりもその角を大切にした向きはなかったろうか。

私はこれに関連して、一九二四年に遭難したマロリーとアーヴィンにまつわるピッケルのことを想い出す。遺された一本のウィリッシュの所持者をマロリーと見做した経緯は、錫杖と剣の運命に似ている。

出て上の台を高鳥コースの方へと登った。ゲレンデの中程からの一面の残雪は歩きよい硬雪で、登りつめてからはグリセーディングに都合よい斜面を選び、降りをたのしんだ。見晴かす西の空には朝日連峯が輝いていた。飯豊は遠く春霞の中にあった。

第二日は中央ロープウェイを利用して鳥兜山頂に出て、雪野原を三宝荒神山の裾に広がるパラダイス高原へと歩いた。この辺はスキーの若者達で大賑いだった。中食をパラダイスロッジですませた一行は三々五々それぞれの歩調で紅葉峠を経て、鳥兜と三五郎岳の懐といった地形に当る独姑沼池畔の山の家についた。お八つ時分だった。同じ場所に古くからあった山の家は老朽化し、昨秋欧州の田舎家風鉄筋木造のガッシリした二棟の二階屋になった。スキーゲレンデの騒音から遠ざかり位置はよい。ここは山形県観光協会の所有で特定の運営委員会が経営するときく。

二棟とも全く同型で平階に調理室と食堂、上階は各室に便所と風呂付三段ベッド設備の客室が八つあるから、一棟の収容人員は二十四というわけだ。ここの宿泊は二食付一泊一人税込六千五百円だが、早朝個室で入浴も自在だから適正な値段とみるのだが、食事内容については私には異論がある。例のヘソ曲りと言いたもうなかれ。何もロープウェイやらチェアリフトで来られるからとはいえ、こんな山家で似て非なる欧風料理は恐れ入る。私はここで開き直るつもりなんか毛頭ないが、せっかく造った立派（豪華という意味ではない）な山の家なんだから、自然環境と建物とにふさわしい食物が給されたらと望むのは私だけでもあるまい。

もっとも現今の日本型食生活がいとも怪しげなものになってるからそれに順応してるんですよ、と言われるかもしれない。従って準世捨人然たる私めは兎角の評を謹しみたい。そんなことよりも山の家では早暁熱い風呂から出て、足ごしらえよろしく残雪の山坂を歩き、前日に続いて飯豊、朝日連峯の遠望を満喫し得ただけでもこの行の値打ちはあった。喜寿の後藤君の至れり尽せりの配慮と小倉夫妻の御協力に感謝して老らくの蔵王漫歩はおわった。

愛鷹山不登拝記

河野幾雄

矢倉岳（「山」四二八号）ゲンコツ山（同四三〇号）の登山に味をしめた我々は、本年五月十一日に愛鷹山へ行った。この山は、そばの富士山より早く生まれ、かつてはそれよりも高かったという事実が、三田幸夫隊長のお眼鏡に適ったからである。ところが、麓の

山小舎に泊った夜から風雨が強くなって、とうとう登れずに帰ってきた。山には登れなかったが、それ以上の貴重な収穫が二つあった。第一は加田勝利氏という隠れた偉材の率いる「沼津かもしかアルパインクラブ」という会員数タッタ八名の小山岳会の、南アルプスにおける特別な貢献を発見したこと。第二は山小舎が、やり方によっては如何に容易に建てられるものであるかという実例を目のあたり教えられたことである。

我々が行くと聞いて、静岡の山本朋三郎会員がその懐具合を察し、前記山岳会所属の「かもしか小舎」を紹介して下された。我々にしてみればかえってこの方が有難く、願ってもないことだった。きけばこの小舎は会員の拠金だけで建てたものだという。この会は昭和四十六年に加田氏等によって創立され、本年は十周年にあたる。その記念に、最近、記録集を発刊したが、三六六頁の大冊である。南ア全域はもちろん、特に注目されるのは光岳以南の山域が詳細に記述されていることである。従来誰も手をつけなかった地域で、頂上は踏んでも、沢や尾根を丹念に調べた者は絶無であった。しかしこの山域には、池口岳、中の尾根山、大無間山、黒法師山などの、何れも二千㍍を越す山が、ずらり並んでいる。加田氏等の努力によって今ようやくその全貌が明らかとなった。この会が、かくも僅少の会員でこの偉業を達成したことは驚くべきことである。

山以上に我々を驚かせたのは、小舎である。昭和五十三年の「一の小舎」を皮切りに、翌五十四年に「二の小舎」を、昨年「三の小舎」と、毎年続けて都合三つの小舎を同じ場所に建設した。場所は沼津市内に偶然残っていた松沢渓谷の原生林中にある。小舎の傍らを松沢がとうとうたる響きをたてて流れ、クモを餌にハヤが釣れる。沢蟹やカブト虫が群棲し、六月には蛍が飛び交う。小舎はいずれも三坪の小さいものではあるがここにその秘密が隠されている。三坪以下の建築物には、うるさい建築法規が一切適用されないという法律がある。つまりこの小舎は建築物では無い。建物でないから電気も水道も引いて貰えない。しかし、二㌔上流から湧いて出る松沢の水は水道以上の清澄さがある。電気の代りはランプが果す。法律の制約も加田氏の手にかかると天与の恩恵に変わる。いくら小さくとも、三つも建てれば大きくなる。二段ベッドがそれを倍加する。換気扇の代りに無双窓がある。組立式の床を外せば、囲炉裏を切った土間が現われ、雨の日でも焚火で飯がたける。収納設備はすべて出窓式だから三坪には無関係である。その他数え切れない新考案や珍発明が随所に見られる。

氏の小舎は、人間の智能の見事な結集である。さらに感嘆に堪えないのは、氏がこの小舎を私物化せず、ボーイスカウトや小学生に開放していることである。一泊三百円。夏になると一夜数十名の少年達が、交代でここを訪れ、飯盒で飯を炊き、ハヤを釣り、カブト虫を探し、水浴び、やぶこぎをやる。小舎が満員の時は、対岸の河原の草を刈って天幕を張る。会員が南アの頂稜に張った天幕は寝袋とともに総動員されて、少年の宿になる。これすべて、次代の山キチを育てんとする加田氏の深謀遠慮と推察される。我々一行は小舎へ行く前に加田邸へ招かれて、手厚い供応にあずかった。その席へ静岡から山本氏も馳けつけて来られた。通されたのは応接間に非ずして、邸内の「肩の小舎」の標札の下る山小舎であった。席上、紹介によって、会員の半数が本会の会員であることを知った。我々の仲間であった。我々は沼津にかかる篤志会員の現われたことを誇りにせねばならぬ。

報告

静岡支部総会報告

四月十一日、駅前の珠賀美神社社務所にて、委任状三十三名を含め四十七名出席で開催。

新年度役員　支部長・山本朋三郎　総務・安間　荘、会計・望月福次、会場集会・杉本宜明、勝見幸雄、行事・田辺恵造、池上和男、水野公男、監査・石間信夫　稲垣一郎

二十四回　紅葉会　期日は十一月十四～十五日（第一土、日曜日）第一日　静岡駅集合、大日峠を経て、井川青少年の家にて懇親会　第二日　観行峯下、県民の森―井川湖畔―大鉄井川駅（解散）バスで静岡駅または大鉄井川線で接阻峡を経て千頭・金谷駅。希望者は三日目に寸又峡温泉大鉄山の家泊。以上の基本決定。

一行は、三田幸夫、小原勝郎、小原晴子、島田　巽、織内信彦、金坂一郎、太田　敬、河野幾雄。

熊本支部総会報告

五月二十三日午後六時より久住町の国民宿舎「久住高原荘」でおこなわれた。行事報告、会計報告などがあり支部役員は次のように決まった。

支部長・西沢健一（再任）、委員・奥野正亥、馬場猛（以上再

第三十五回　ウェストン祭　信濃支部

今年もウェストン祭の準備は二月ころから始められた。記念品の選定や見積り、発注業者との交渉である。四月の支部総会で全員に説明し五月に入ると協賛団体との打ち合せ。実行委員は奥方まで動員して記念品の手当てをした。

六月五日　関係諸材を上高地西糸屋にそろえ、ウェストン祭実行委員会本部を設置した。

六月六日　朝七時に島々宿で受付の予定が、すでに四時ころから徳本峠へ向けて歩き始める人もおり、予定を一時間ほどくりあげる。記念品の販売開始。この日峠を越えた者は五百人ほどだった。受付と記念品担当は金子亟二会員が責任者になり、島々宿と上高地に手分けし上条

今年もまた上高地山研で逢いましょう！

任）、石井久夫、工藤文昭、大木野徳敏（以上新任）

翌二十四日は出席者全員で久住山（一七八七㍍）に登った。生憎山頂には霧がかかって広大な久住高原を見下せず、脚下に可憐なイワカガミの咲くのを見るのみであった。

（参加者　奥野正亥、西沢健一、馬場猛、馬場千代子、石井久夫、本田誠也、本田俊子、菊池更生、門脇愛子、樋口　格、前田辰男、中村恵二、会員外二名）

第一回日韓親善交歓会と交流登山報告

青年懇談会

青年懇談会では、四月三十日より五月五日まで次のごとく日韓親善交歓会と交流登山を行った。

四月三十日　社団法人韓国山岳会加盟団体であるORIM山岳会員五名を山岳会会室に迎えて、贄田、小川両君の手になる鰹のタタキ、鳥賊や鮪の刺身、寿司、オデン等、数々の料理が並べられ、岡島君の司会により午後七時より九時過ぎまで親善交歓会が行われた。

出席者　韓国山岳会・李光孝、趙大庚、李吉廷、金基演、鄭喜秀

日本山岳会・折井健一、金坂一郎、織内信彦、神崎忠男、中川武、贄田統亜、今村千秋、岡島成行、小川武、佐村雄三、勝山康雄、三沢幸夫、西奥亮平、西村政晃、村木富士、高橋聡、酒井守、大倉昌身、中沢光江、秋元孝子、鈴木昌司、磯野剛太、堀内章雄。

なお当日中沢、秋元の両嬢には早くから買物、洗い方等の裏方を一生懸命手伝っていただき感謝致します。

＊

五月一日　韓国山岳会五名と西村は、新宿駅午前八時発のあずさ三号にて白馬駅へ、高橋、勝山、三沢の三名は早朝五時、車で出発し、途中大町で食料等の買出しを済ませ白馬駅へ午後一時二十分着白馬駅で汽車隊と合流し、車に分乗して猿倉まで行かんとするが、今冬の豪雪のため、二股―猿倉間の道路が雪崩で危険なため車で入ることが出来ず、仕方なく二股より本日の幕営地である小日向のコルに向かい十四時三十分歩きだす。

猿倉山荘の少し上にある猿倉台地に着いたのが十七時三十分過ぎになったので小日向のコルまで行くのを諦め幕営する。

五月二日　早朝四時三十分に起床し、東の空を見ると太陽はまだその姿を現わしていないが、朝焼けがわずかばかり見られ、何か今輝夫、上条敏昭、東京から中沢光江、関西から三上智津子の各会員が参加してこれに当った。

例年のように峠を越える参加者の中に記念山行担当の役員福井芳隆、百瀬一茂と保科文人、菅野政夫の各会員が分散し行動する。道中岩魚留小屋手前に残雪があり、今年の大雪をしのばせる。昔ながらの小屋で囲炉裏を囲み休息し、小屋主特製の山の幸を頂戴する。外につながれていた小犬がかまってもらいたげにワンワンキャンキャンと吠える。

徳本峠に出ると、時々雲間からもれる陽光を浴び穂高連山の尾根が光る。徳本の小屋で少量だが湧水が使えるようになった。先年亡くなった小屋主が恵んでくれたのだと小屋の人が話していた。峠の西側には雪が多い。

今年も参加者全員何の事故もなしに上高地へ下る。

記念山行担当者とは別に本会顧問にもなっている、高山忠四朗支部相談役、奥原教永支部長、実行委員会本部付の蒲生明登、田中弘美は実行委員長の内ケ島吉広とともに東京からの佐々会長、渡辺副会長などの応対、地元への挨拶、連絡ととびまわり、碑前祭準備担当役員の原喜彬、西牧康、百瀬寿雄、中島忠が中心となって角田啓蔵、一志幸夫、田中仲治、稲越利夫、綿引安人、飯村富彦、日置邦、山本治美、吉武正子でテント、スピーカーなど前日に済ませるものを碑前に設えたりする。

夕刻実行委員会本部の西糸屋で全員夕食をともにしながら、最終的打ち合せをする。

六月七日は前日の晴天がウソのようににわか雨が朝から降っていた。とに角十時の開会に間に合うよう早朝から受付の机、記念品、横断幕と忙しく担当会員は動き回る。

雨もやみ定刻に碑前祭が始まった。形どおりといえば形どおりだが、仕事の合間をぬい縁の下の力持ちを自覚して皆で準備し、今年もウェストン祭を開催した。

安曇村村長などの来賓と、主催者側の佐々保雄会長の挨拶と、小学生のころ泣きながら徳本峠を越えさせられたという渡辺兵力副会長の記念講演。アルプス少年少女合唱隊やエーデルワイスクラブの合唱。今年はばかに報道関係者が目立った。日本山岳会の者だけでやっていた頃とは随分違う。しかし自分を売りこもうともせずに黙々と祭りを下支えしているのは表に出てこない多くの会員たちだ。

記念講演をする渡辺副会長／撮影　岡沢祐吉

碑前祭のあとの午餐会は、担当の役員井口謙司、赤羽孝一郎、早乙女緩次、清水悟郎および小林俊樹の諸会員が中心となり、本部からの役員方や、営林署、環境庁の来賓方を接待した。

そして今年も日本山岳会主催第35回ウェストン祭での信濃支部のつとめを無事果し終えた。

＊　＊　＊　＊

第三十五回ウェストン祭にて　小林　碧郎

ウェストン祭岳人（がくじん）老いず桷（ずん）古りぬ（桷＝小梨）

夕映えに雪崩（なだれ）つくして穂高立つ

日の天候が気にかかる。
六時、再度天空を観察すると、巻雲が少しずつ広がり出しているので本日の天候は長く持たない

お知らせ

日本山岳会『会報』合本
会員特別頒布について

かねてより懸案であった本会の『会報』覆刻版二冊の特別頒布が版元大修館書店とのあいだで、左記のようにきまりましたので、お知らせいたします。

これは『覆刻日本の山岳名著』（昭和五十年）『新選覆刻日本の山岳名著』（昭和五十三年）の刊行にあたって、特別附録としてそえられたものです。今西錦司元会長のころより分売をのぞむ会員が多かったのですが、このたびその希望にこたえることができました。

昭和五年より第三次マナスル隊の成功にいたるまで、本会の歴史をつたえる貴重な資料であります。頒布部数にかぎりがありますから、御希望の方はお早目にルームあてお申しこみ下さい。

（図書委員会）

1　『会報』第一集

第一号～第一〇〇号　昭和五年十月より十五年十二月まで
総索引つき　B5判上製函入
八五二頁　頒価一二〇〇〇円

2　『会報』第二集

第一〇一号～第二〇〇号　昭和十六年一月より三十三年十一月まで　総索引つき　B5判上製函入一一六四頁　頒価一四〇〇〇円

3　会員特典と申込み方法

本会会員にかぎり左記の一割引にて頒布いたします。

第一集　一〇八〇〇円
第二集　一二六〇〇円
二冊合計　二三四〇〇円
（分売可）

お申込みは、二冊セット、第一集・第二集の別、希望冊数、住所・氏名・会員番号などを明記の上、現金をそえて日本山岳会事務局まで。現品の発送は事務局の指示にしたがって、版元より直送いたします。

（送料は版元負担）

ぞ、と皆で話しながら出発の準備を進め、七時三十分双子尾根より杓子岳経由で白馬岳を目指し出発する。

小日向コル八時四十分着、樺平より急峻な雪稜をゆっくりユックリと登り午後一時二十分着。この頃より薄雲が張り出し、昼食後出発しようとして剱岳を見ると剱岳の頂上には黒雲が厚く覆っていて風も次第に強くなる。

出発後すぐ小雪が降り出し、霙に変り風は益々強くなりだしたので、白馬岳登頂を諦めて大雪渓を下降することにする。大雪渓の上部にはまだ大きく雪庇が張り出していて何時落ちるか分らない状態なので、グリセードで快調に下ろうとするが軟雪のため全くすべらず、仕方なく雨具のズボン等をはいてシリセードでどんどん下り十六時帰幕する。

五月三日　本日の行動予定は、白馬槍の北稜、南稜を登攀する予定であったが、稜線上は濃いガスで覆われていて無理に登攀をして韓国の友人に事故でもあると困るので、予定を変更して、天幕を撤収して黒四ダム見物に切換え下山する。大町まで行き（大町着十時三十分）交通事情を調べると十時より四時まで扇沢―日向山高原の間が雪崩の危険性があるので通行止めとのこと、ふたたび予定を変更し上高地に回ると、中の湯より（中の湯着十四時三十分）先が非常に混んでいて上高地に六時頃着く始末であった。

上高地では、もし山研が開いていたら山研に泊まろうと行ったところ、水その他の便のためかまだオープンしておらず、雨の中小梨平に天幕を張る（車を運転していた勝山君が駐車場に車を入れることの出来たのは午後八時過ぎであった）。夜、最後の山の中でのコンパを日韓の山の歌等をお互いに披露しながら盛大に行う。

五月四日　前夜来の雨も止み、朝食後西村は韓国の友人五名を案内し明神池まで散策する。他の三名は天幕等の撤収を行い、全員が揃ったところで下山に掛り河童橋で写真を撮り十一時上高地発、車は昨日と同じく中の湯まで全く動かず、その内昼も過ぎ空腹となってきたので、残っていたラーメンα米等を取り出して道路上にデンと腰をすえ昼食の準備を始める。車が多少動くとそのたびにコンロとコッフェルを移動し、ラーメンを作り上げ昼食とする。松本駅着午後四時三十分、西村他五名はすぐ汽車に乗り帰京する。

五月五日　新宿午前十一時発のハトバスに韓国山岳会の五名と、西村政晃、上原真一、高橋聡の三名が案内役となり乗車、午後五時に新宿に帰ってきて趙大庚氏の友人で横浜在住の鈴木昌司氏に今後のことをお願いし、今回の交流登山を無事終了することが出来た。

なお四月三十日と五月四日の夜は神崎忠男宅三名、西村政晃宅に二名ホームステイとした。

また今秋十月には日本より第二回日韓交流登山として、ハイキング隊、岩登り隊、長期登山隊等各種のパーティに分けて訪韓する予定である。

登山隊　李光孝、趙大庚、李吉廷、金基演、鄭喜秀、西村政晃、高橋聡、三沢幸夫、勝山康雄、

（高橋聰）

会務報告

5月理事会

5月25日　午後6時30分
本会ルーム

出席者　田口、渡辺副会長、神崎、河村、菅沢、伊丹、田村、中村、小倉、水野、大倉、西村、赤松、高橋、岡沢、松家、各理事、大塚、村木評議員、鳴原、太田監事

委任　佐々会長、佐藤、小原、松丸評議員、川上、鈴木理事

◎協議事項

▽田口新副会長挨拶

▽各理事の担当確認の件（渡辺副会長提案）

現在の委員会組織について再検討をしてはどうかという意見がでたが、この問題は時間をかけて審議することにし、当面は次のように各委員会担当理事をきめることにした。

追悼

岳友 小池新二氏を悼む

五月九日の土曜会の集まりには、松本熊次郎、鶴岡元之助、島田巽、小林由美子の諸氏と私が来ていました。そこへ野口末延氏が来られ、古い会員、小池新二氏が五月四日に逝去され、五月七日に葬儀が行われたとの朝日新聞の切り抜きを持参、当日の出席名簿にメモしてくれました。享年七十九才の由、今は故人となった小池新二氏とは、島田さんも、御知已であったので、お互いに古い岳友の逝去を悲しんだものでした。

故人は日本山岳会でも、かなり古い会員でして、会員番号一七一〇番ですが、私が初めてお会いしたのは、大正八年十一月で小池氏が霧の旅会へ入会した時で、まだ紅顔の美少年でした。昭和五年発行の霧の旅会の名簿を見ますと会員番号は十六号でして、当時百二十三人の会員でしたから、かなり早期の入会だったと思います。

故人の若き日の山行を追憶するために、古い霧の旅を繰って見ますと、すでに大正九年発行の第四号会報欄に、新入会員紹介として、受付番号三十六、小池新二、牛込薬王寺町五〇、紹介者、伯田信一として載せてあり本号から、「小仏峠と石老山」本欄十四頁および「上信国境」本欄十九頁と、写真「浅間山鬼押出より草津白根を望む」「六里ケ原より角落火山群」の二枚が載せられていました。

さらに霧の旅第五号には、雑録欄五十七頁に「野州行道山」と「吾妻高原より浅間山」の写真一葉が載っており、第六号には、本欄八頁に「上信国境（二）」と写真「恩賀の谷より谷急千駄木の連嶺を望む」が、また第七号には、本欄一頁に「上信国境（三）」と同じく四十二頁に「陣場からトツサカ峠へ」が、また第九号の本欄三十頁に「上信国境（四）」（八風山より荒船山まで）が極めて流麗な文章で載っています。

さらに第十一号を開けば「白山平瀬口登路」が本欄に、十三頁にわたって載せてあり、また雑録には「中房より上高地まで」が書かれており、第十四号には、珍しく、翻訳物「カール・クラール」の「理由に就て」の訳文が載っています。

また大菩薩連嶺号には「大菩薩峠雑感」が、さらに第二十四号「山の湯特輯」には「東北ところどころ」と写真三葉が、第二十五号「山の湯特輯」には「ハム坊日記」が、また第十九年五十三号には、「鬼首より栗駒へ」が通信欄に、次で第五十四号「木暮先生追悼号」には「先生と私」と題して、故人自身の山に登る心情を吐露しているのがはっきりと分かり、これが霧の旅会誌への最後の投稿となっています。

故人とは、野口氏は、若い頃いく度か奥多摩方面に御一緒された思い出があるそうですが、私は、学生姿でお会いした時の印象が深く、その後何年かの後に、故人のお父さんが法制局長をされている由の頃、そのお屋敷へ呼ばれ、当時その道では有名だった名古屋の伊藤孝一氏の映画「雪の日本アルプス」の試写があり、そのすばらしさを共に鑑賞したのが最後でした。

その後、遂に今日まで、噂すら聞くことが無かったのに、突然の訃報に接し、改めて、霧の旅に投稿された、故人の若き日の山への歩みと、感触を再読し故人を偲び、ここに謹んで御冥福を祈る次第であります。

昭和五十六年六月十日

山崎金次郎

総務（神崎、伊丹）、財務（西村）、集会（河村）、山研（鈴木）、学生（菅沢）、会報（岡沢）、山日記（小倉）、海外（田村）、自然保護・科学（中村）、医療（赤松）、山岳（水野）、婦人（高本）、図書・書評（松家）、高所遭対（川上）、指導（大倉）、青年（高橋）

常務理事会制の承認の件（渡辺副会長提案）

今期も常務理事会をおくことは了承。人選は次回理事会に提出、日常会務だけでなく、山岳会の長期的な問題を発議する総務的委員会の強化について提案があった。

会の運営、委員会組織の再検討理事会協議進行中に、多くの理事から各種の意見がでた。この件についてはこれからの理事会の課題として検討をすることで了承した

▽遠征隊推薦の件

東海大学山岳部のネパール・ヒマラヤ登山計画（ビッグ ホワイト ピーク登頂、一九八二年）の推せん申請の件 了承

6月理事会

6月8日 午後6時30分 本会ルーム

出席者 佐々会長、田口、渡辺副会長、神崎、河村、菅沢、川上、小倉、赤松、大倉、松家、西村、中村、鈴木、高橋、岡沢、田村各理事、小原、大塚、村木各常任評議員、太田、鴫原各監事

委任 佐藤、松丸、高本、伊丹、水野

◎**審議事項**

▽佐々会長挨拶

▽会務報告（省略） 渡辺担当

▽新委員会について 渡辺提案

前回理事会では6月理事会までに各委員会構成をまとめる予定でいたが、十七委員会中、七委員会が届出されたに止った。委員会活動についてなお若干検討をして、7月理事会までに終わることにした。

▽会の運営について 神崎提案

7月理事会の前に、新しい各委員会委員全員が集って、会の今後の運営についての全体会議をもつ計画が提案された。この件については全理事が賛成し、七月十九日（日）、私学会館で終日実施し、夜は新旧役員懇談会を行うことにした。

▽婦人部カンパの件と学生部ボゴダ峯計画の件 （渡辺提案）

了承

ルーム日誌（56年5月）

7日（木） 学生部集会

12日（火） パタック教授を囲んで

13日（水） 青年懇談会

14日（木） 自然保護委員会

22日（金） 科学研究委員会講演会、婦人懇談会

25日（月） 理事会、図書委員会

28日（木） 学生部集会

29日（金）　高所・遭対委員会
婦人懇談会
今月の来室者　423名

会員移動（5月）

物故
七一五二　小野寺　良（56・1・5）
一七一〇　小池　新二（56・5・4）
三九一六　角口　想蔵（56・5・6）
六〇三二　三重野　勝彦（56・5・6）
九三九　八木橋豊吉（56・5・19）
五一九七　武藤　清次（56・5・31）

支部変更
六五六八　吉田　紘臣　東海へ
七〇一一　岡田幸千生　宮城へ
八〇八七　成沢　暢　岩手へ
八七〇五　高山　末吉　北海道へ
三六一一　牛山　大六　他へ
七三七四　東川　尚三　福島→北海道へ

名称変更
四八七四　防衛大学校山岳部→防衛大学校校友会山岳部へ

退会
三四二四　村岡　純
七七七七　森田　忠志

改名
七九五六　高沢英夫→英雄へ

終身会員
二〇四一　寺村　栄一

図書受入報告

図書委員会

昭和 56 年 3 月受入図書

1　島田・串田・山崎・近藤編「小島烏水全集・第1巻」大修館書店　1981（版元寄贈）
2～6　雄山閣編輯部編「大日本地誌大系 25～29／新編会津風土記第1巻～第5巻」雄山閣　1962（購入）
7　月光善弘編「山岳宗教史研究叢書7 東北霊山と修験道」名著出版　1979（購入）
8　宮田登・宮本袈裟雄編「山岳宗教史研究叢書8 日光山と関東の修験道」名著出版　1979（購入）
9　鈴木昭英編「山岳宗教史研究叢書9 富士・御嶽と中部霊山」名著出版　1980（購入）
10　高瀬重雄編「山岳宗教史研究叢書 10 白山・立山と北陸修験道」名著出版　1979（購入）
11　五来重編「山岳宗教史研究叢書 11 近畿霊山と修験道」名著出版　1980（購入）
12　宮家準編「山岳宗教史研究叢書12 大山・石鎚と西国修験道」名著出版　1980（購入）
13　中野幡能編「山岳宗教史研究叢書13 英彦山と九州の修験道」名著出版　1979（購入）
14　五来重編「山岳宗教史研究叢書 14 修験道の美術・芸能・文学」名著出版　1980（購入）
15　牧野文子著「あめんぼのゆめ」理論社　1981（著者寄贈）
16　徳久・塚本・湯浅・雁部監修「新岳人講座5 日本の山」東京新聞出版局　1981（版元寄贈）
17　小西政継著「北壁の七人・カンチェンジュンガ無酸素登頂記」山と溪谷社　1981（版元寄贈）
18　中村謙著「山ひとすじ・遺稿と追悼」茗溪堂　1981（中村正英氏寄贈）
19～26　吉田東悟著「増補大日本地名辞書第1巻汎論・索引第2巻上方第3巻中国・四国第4巻西国第5巻北国・東国第6巻坂東第7巻奥羽第8巻北海道・樺太・琉球・台湾」冨山房　1980（購入）
27　Kaoru Tanaka「Geographical Contribution to a Periglacial Study of the Hielo Patagónico Norte with special Reference to the Glacial Outburst Originated from Glacier-Dammed Lago Arco, Chilean Patagonia」1980（田中薫氏寄贈）

昭和 56 年 4 月受入図書

1　徳久・塚本・湯浅・雁部監修「新岳人講座9 山の科学」東京新聞出版局　1981（版元寄贈）
2　アルベルト・バウムガルトナー，ハンス・ビーベルリーター，ノーマン・ディーレンファース，エルヴィン・グレッツバハ，ハンス・ハイエルリ，トニー・ヒーベラー，ギュンター・シュヴィツァー共著／西堀栄三郎，宮下啓三監修「図説百科山岳の世界」大修館書店　1981（版元寄贈）
3　杉本光作著「私の山谷川岳」中央公論社　1981（版元寄贈）

写真集
飯豊連峰　山と花
日本山岳会越後支部会員
小荒井　実著
■序文今西錦司■監修藤島　玄

四季折々に見る飯豊の山々は、一体何を語ってくれるのか？
本書は、会津・喜多方在住の著者がこの山の全容と、そこに彩る花たちを見事にとらえた豪華な写真集です。
▼山名入り航空写真や、見開き四ページの折込写真など、迫力ある山岳写真集
▼特産種イイデリンドウをはじめ、豊富な高山植物の生態や形態を見事に活写
▼雪形による農事暦など、民間信仰、民俗学に及ぶ著者独自の解説もユニーク
A4判変型・総178頁・上製函入り
内容見本、はがきで小社宣伝部まで
最新刊発売中
定価15000円

原色日本産
ツツジ・シャクナゲ大図譜
■絵・太田洋愛■解説・富樫　誠
好評発売中・内容見本呈・定価38000円

北海道の高山植物と山草
伊藤浩司著・発売中・見本呈・定価4300円

誠文堂新光社　東京神田錦町1の5　03(292)1221

山 433-1981・7・20（第三種郵便物認可）

あとがき 新年度の編集委員会の構成は山崎委員長、片山全平、近藤信行、堂本暁子、小倉厚、大森久雄、松家晋、岡沢祐吉の以上八名です。全員多忙な毎日を送っていますので、思うように動けず残念ですが、努力して伝統ある会報を守っています。

昭和五十六年七月二十日発行
102 東京都千代田区四番町五―四
サンビュウハイツ四番町
発行所 社団法人 日本山岳会
発行者 佐々保雄
編集代表 岡沢祐吉
電話東京（261）四四三三
振替口座東京三―四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所 株式会社 技報堂